

NGOに「一寸の虫にも五分の魂」を

小原秀雄

野生生物保全論研究会会長(会報掲載時)・女子栄養大学名誉教授

地球の危機が叫ばれて久しい。野生動物の保全に関心を持つ私たちには野生動物をめぐ
るできごとに、常に関心が惹きつけられる。野生動物の危機と地球生態系、ひいては地球
の自然の危機につながるのを知ることは大切だし論拠がある。野生動物の衰退は地球の自
然の不健康を示しているのだ。こう書いても、なんと抽象的な、といわれることは少なく
なった。30年余り前には、話はわかりますがどうもねえ、つながりません。日常的なこと
とつながるように説明できませんかと問い返されたものだ。マスコミ関係の多くの人は現
実から遠い話で、というのがキマリ文句で(断わりの)あった。

しかしごく最近では全体としては余り変わらないながらも多少耳を傾ける人もあり広が
りもある。というのは、異常気象が生まれて、それは自然が異常なことの象徴ではないか
と思うようになったからだ。ちょうど体調が悪いと保健情報を気にするようにである。

一方でまた、それにもかかわらず相変わらず捕鯨を推進する。象牙の密輸事件が登場す
る。こうした自然からの収奪は、生産されるモノとは全くちがう。象牙は成長した状態に
なるまで、生後50年はかかる。鯨も、生育するまで種によるちがいはあるが、20年以
上かかる。現在の現実の動きにはいくつかの流れがあつて、一様ではない。それがまた「コ
トバ」で伝えられて人間の認識、時には思いこみを作るといったことが起こっている。ま
さになんでもありの世の中だ。

私たち人間は、「コトバ」によるコミュニケーションで情報や意志、思想、想いなどを伝
える。今ここで書き連ねているのも「コトバ」である。「コトバ」は真実を伝えるとは限ら
ない。だが見え見えのウソも、そのうちに馬脚を表す。しかし戦争中にも、また現在でも、
知っても「後の祭り」という「宣伝」が広がる。

一方で今もPRはまさに針小棒大が当然となった。現代人はそれにならされている。恐
ろしいことに人間の内なるヒトに訴えたり伝えたりする技術が発達していく。

金のないNGOや小さい組織に比べて大企業その他はくり返しやテレビなどを通して圧
倒的に信じさせる「方法と戦略」ができる。金と力だ。NGOの主張は正しくとも比べもの
にならない微弱な影響力である。確かなことは主張はそれなりに論理的であり、説得的で
あった。以前はマスコミでもそうした声を積極的にとり上げようとする努力もあった。

ところが、企業に加えて行政は一応選挙で選ばれた首長や政府など民主的な手続きを経
た権力に基づいて行う。捕鯨はその例である。さらに象牙を購入するのもその一つで、政

府が経済発展を第一にしているのだから、こうした活動を活発化しようとの「大義」が大前提なのである。好景気を人々が望んでいるといえる。経済活性化が自然へのダメージとなるのを避けてなんとかと願うのは別として、こうした状態が続くことは地球の危機を高めていく。

経済社会のグローバリズムの進行は、世界中で途上国をその流れにいやおうなしに巻きこんでいく。私は毎年東アフリカの自然と関係者に会っているが、野生生物界の危機につながる大きな流れの進行をひしひしと感じている。

短い文章ではいいつくせないが、この大きな流れは世界的（いわゆるグローバリゼーション）で、途上国では自然資源を売ること以外方法は限られている。難しい新しい方法を探して、なんとか自然を崩壊させずに経済発展をと願ってはいるのだが。

小さい NGO ながら巨大なこの流れからの転換へ力を尽くす方法は、JWCS と 2 つ考えられ、実践したい。

一つは、欧米先進国内の良心的 NGO、国際的な「真の」味方と協力して、戦略を立て少しずつ実践していくことである。残念ながら日本の野生生物保全 NGO は戦略も新しい世界の流れの認識も欠けている。

第二に、いいかげんなコトバや表現が充ちている中で、内実をともなったコトバを確かにしておくことだ。これは未来につながる。最近の事例ではわずか 10% 余りのクマの学習放獣に対し、射殺はなんと 2,637 頭である。（朝日新聞 2006 年 10 月 31 日）。それなのに学習放獣が大きく取り上げられるといった報道は戦略的である。

JWCS も小さいからこそ大きな効果を考えつつ、内実ある提言などを残さねばなるまい。

(JWCS 会報 No.47 2006 年 11 月より転載)